

R8西表島特集③ 人と動物の共存の難しさ 野生動物とロードキル

イワサキセダカヘビ探しのナイトツアー中、ポイントへ向けて車で移動していた時、運転席の堀井さんが急に「**今スジオいましたけど、どうします？**」と言う。道路にヘビが見えたらしいのだ（種類まで分かるのすごすぎ）。「スジオって**サキシマスジオ？**！そ、そりゃ降りましょう！」すぐさま車を止めてもらう。夜の道路に動物が出てくることはたまにある。でも、サキシマスジオというヘビはなかなか珍しい種類だ！

スジオが見れちゃうなんて嬉しい～！と意気揚々と車を降りたが、なんだかこのヘビ、様子が変わる。「**轢かれてますね、もう間もなく死んでしまうでしょう**」と堀井さん。なんと、我々が通る少し前に車に轢かれ、外傷は無いが首を骨折しているようで、弱々しく体をくねらせていたのだ。…そして数分後、徐々に動きが鈍くなり、**我々の目の前で絶命した**。なんという事だ。動物の殞死体には今までも出会ってしまったことはあるが、目の前で死に絶えていくところに遭遇したのは初めてだ。**これはかなりショックだった**。みんなもかなりつらそうな表情だ。

これが「**ロードキル (Road Kill)**」の実情である。西表島に限らず、野生動物が多い地域では深刻な問題になっている。とくに西表島は、2021年に世界遺産に登録され、今観光客が増えている。結果、交通量が増えロードキルの被害も多くなってしまっている。観光業が盛んになるのは現地も潤うことになるので必要なことなのだが、このような事態を招いていることも忘れてはいけない。

また、堀井さんは「**現地の人にもヘビ嫌いが多くて、中にはわざと轢く人がいる**」と教えてくれた。このスジオがどのように轢かれたのかは分からないが、意図的に轢かれた可能性もあるというのだ。一般人からしたらヘビは嫌われ者だ。ましてや沖縄地方にはハブがいる。農作業をしている時に出くわしたらかなりの恐怖だろうから、毒ヘビを敵視する気持ちも分かる。でも、**ヘビは生態系の上位にいる捕食者**であり、数が減ると生態系が大きく崩れてしまう可能性がある。また、島にいる10種の陸生ヘビのうち、毒ヘビはたった2種のみ（そのうち1種は幻級なのでそもそも出会わない）で、今回のスジオは**無毒**である。ヘビ全体を嫌う必要はない。「**必要なのは教育なんです**」堀井さんは悔しそうに言っていた。**正しい知識を持ってもらうことが、生物を守るためには大切なのだ。動物と人間の共存**というのは、やはり色々な課題があると改めて感じた。

今回の西表研修の5日間ではよくが見たロードキルは、スジオ、サキシマハブ、オオコウモリ、カラス、多数のカエルやカニなど、かなりの数だった。島全体では年間相当な数が轢かれているのだろう。イリオモテヤマネコの交通事故は、記録が残っている1978年から現在までの間で**102件**発生しているそう（うち死亡が94件）。他人事ではない。東京でだってタヌキなどがかなりの数轢かれている。こういった問題は、**自分の目で見ることが大切だ**と思う。環境問題は実際に見ないと、なかなか自分事として捉えられない。ロードキルなんて無いに越したことはないけれど、スジオの最後を看取ったことでみんなの心に少しでも響くものがあつたなら、西表島まで連れてきた甲斐があつたと思う。

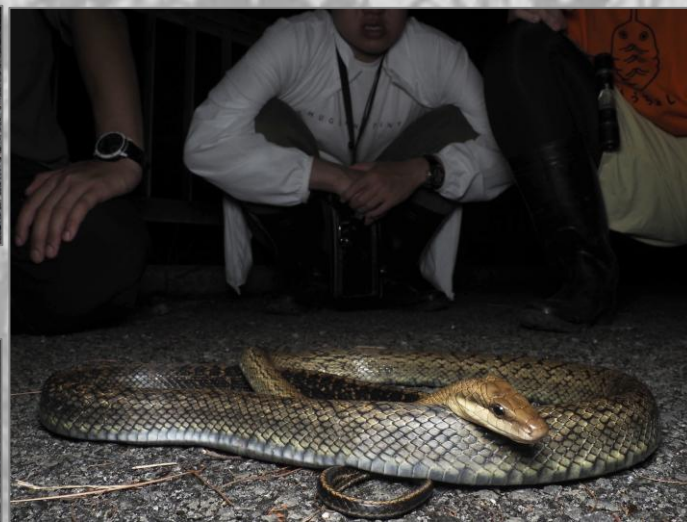


特徴的な尾

尾にだけ線が入るため、スジオ（筋尾）と名前がついている。



「どうせならきれいにして写真を撮ってあげましょう」と堀井さんが整えてくれたところ。この後、土の上に戻して自然に帰してあげた。



車に轢かれたサキシマスジオ・絶命直後の様子 西表島 7月26日

生きているように見えるがこの姿勢のまま息絶えた。外傷は無いが轢かれて首を骨折したようだ。サキシマスジオは最大250cmにもなる国内最大級のヘビで、八重山諸島と宮古諸島に分布する。狙って見ることが難しいと言われており、出会えてとても嬉しい。ただ、初めて見たのがロードキルというのはとても悲しい。人間の便利な生活はこういった野生生物の犠牲の上で成り立っていることを忘れてはならない。



轢かれたサキシマハブ

西表島 7月28日
カエルなどが轢かれると、それを食べるためにヘビや鳥が車道に出てしまいがち轢かれる。生物が多い地域ではロードキルの連鎖も起きてしまう。



轢かれたセマルハコガメ

西表島2018年
国指定天然記念物のセマルハコガメが轢かれてしまっているのを見たこともある。カメは歩くのが遅いので轢かれやすい。